

いしかわ地域づくり円陣2021  
「ウィズコロナ時代の『地域づくり』」開催報告

開催日時：令和3年12月5日（日）13:00～16:00  
会場：オンライン開催（Zoomを使用）  
スタジオ会場：石川県地場産業振興センター  
新館5階 第12研修室

【プログラム】

1. 開会・石川地域づくり表彰授賞式

2. 石川の地域づくり団体による活動報告

- (1) 春蘭の里実行委員会（能登町）
- (2) 北國とおり町にぎわい協議会（小松市）
- (3) 中能登スローツーリズム協議会（中能登町）
- (4) たかしな地区活性化協議会（七尾市）
- (5) ハピネスクローバー（小松市）
- (6) タント演劇学校（能美市）
- (7) エコのたね（小松市）
- (8) 宝活（宝達志水町）
- (9) くくり徳山（能美市）

3. 全国のキーパーソンによるエール講演

- (1) 本田 節さん「被災地で届ける『命の食』のつながり」
- (2) 後藤 好邦さん「ウィズコロナ時代のネットワークづくり」
- (3) 内 慶瑞さん「地域福祉のありかたwithコロナ」

4. オンライン交流会

【参加者数】

(人)

会場	一般	受賞者	報告団体・講師	スタッフ	運営委員・ コーディネーター	計
オンライン	23	—	10	—	8	41
地場産	8	5	—	18	—	31
能美	8	—	2	—	—	10
合計	39	5	12	18	8	82

## 【開催準備】

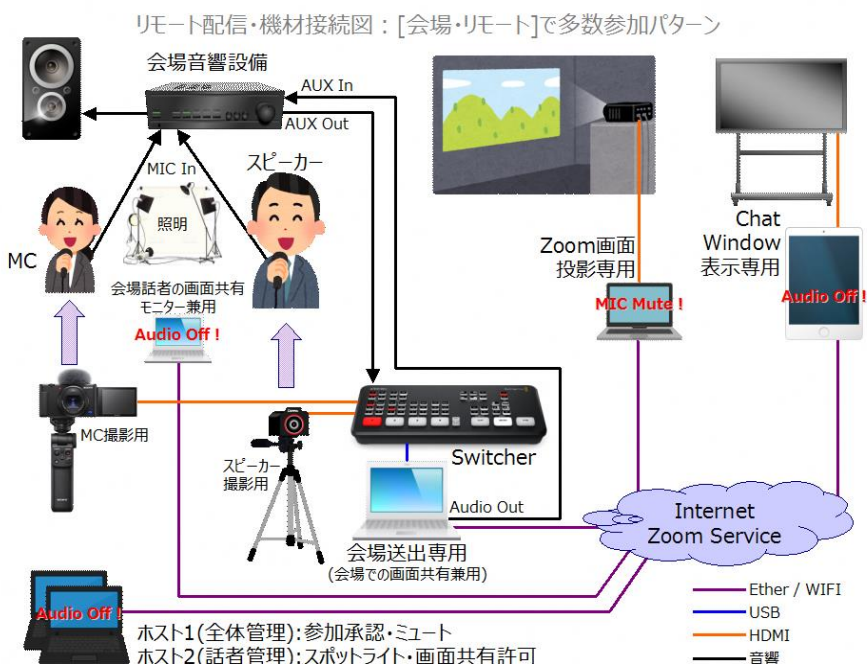
### 1. 用意した機材

円陣をオンラインで開催するにあたり、以下の機材をスタジオ会場に用意した。

機材	備考
アンプ	会場備付
マイク 1	会場備付
マイク 2	会場備付
スクリーン	会場備付
プロジェクター	会場貸出
モニター	会場貸出
ビデオカメラ	
カメラ	
スイッチャー	
PC1	プロジェクター用
PC2	司会台用
PC3	映像・音声用
PC3-2	録画用
PC4	参加者承認・ミュート用
PC5	発言者スポットライト・資料共有用
PC6	事前接続テスト
PC7	事前接続テスト
PC8	事前接続テスト
iPhone	チャット表示用
各種ケーブル	LANケーブル、HDMIケーブル、音声ケーブル

### 2. 接続イメージ

実際の会場でのリハーサルを経て、以下のイメージ図のとおり機材を接続した。



## 【開催内容詳細】

### 1. 開会・石川地域づくり表彰授賞式

#### (1) 開会挨拶

主催者を代表して、澁谷 弘一 石川地域づくり協会会長からビデオメッセージにより挨拶があった。

#### (2) 石川地域づくり表彰授賞式

以下の団体・個人に石川地域づくり表彰の授与を行った。

##### ・ 団体部門・大賞：木郎活性塾（能登町）

不動寺地区住民が小学校の廃校舎を譲り受け、維持管理のほか、廃校舎の利活用と交流促進のための「水車の里の音楽会」を23年間にわたって継続開催し、費用をかけない運営の工夫や住民同士の連携、地域内外の音楽愛好家との交流などにより地域活性化を推進している。

##### ・ 団体部門・優秀賞：たかしな地区活性化協議会（七尾市）

地域内の治安維持・安全確保に加え移住の観点も取り入れた空き家調査の実施や、移住体験住宅や「集落の教科書」を活用した移住促進事業、旧校舎を活用したユニークな賑わい創出事業等、様々な地域づくりの取り組みを実施している。

##### ・ 団体部門・奨励賞：特定非営利活動法人 角間里山みらい（金沢市）

金沢大学角間キャンパスの里山ゾーンを中心に、大学、企業、行政、地域などと協働で、森林・里山の整備や、森林・里山の魅力をテーマにしたイベント活動を企画・実施している。幅広い年齢層の人が楽しみながら森林や里山について理解を深められる取り組みを通して、里山と人とのつながりづくりを推進している。

##### ・ 個人部門：洲崎 邦郎氏（金沢市）

七尾市能登島で農業を始め、農業を通じた島の活性化を目指して、農業組合法人ラコルト能登島をはじめ能登島オリーブの会やNPO法人アグリファイブを設立し、農作物の栽培、流通、販売、加工、飲食サービスなど、入り口から出口までをトータル・コーディネートする活動を継続している。

(3) 審査講評

石川地域づくり表彰審査委員会を代表して、谷本 亙審査委員会座長から、各受賞者の評価されたポイントについての講評があった。

(4) 受賞団体・個人活動紹介

受賞団体・個人からそれぞれの活動について紹介をいただいた。

木郎活性塾

洲崎 邦郎氏

## 2. 石川の地域づくり団体による活動報告

### (1) 春蘭の里実行委員会（能登町）

<発表者>

多田 喜一郎さん

<報告概要>

コロナによる影響は非常に大きく、5月の修学旅行が全てキャンセルになったが、10月以降、修学旅行が回復しつつある。しかしながら、一般の宿泊は、一棟貸しや一部の宿を除いて、すべてストップしており、営業再開は来年5月以降を予定している。

春蘭の里としては、農家民宿を核として、1次産業と観光産業をセットすることで、月収40万円で若者が戻ってきて、赤ん坊の泣き声が聞こえる地域づくりを目指している。24年間で11名が春蘭の里に移住していることが一番の成果である。

### (2) 北國とおり町にぎわい協議会（小松市）

<発表者>

中出 暁史さん

<報告概要>

北國とおり町にぎわい協議会は、小松市中心部の龍助町から西町の地域で若手商店主が中心となって2014年に発足。江戸時代のメインストリートであった北國街道の歴史を活かして、次の時代につなげる活動を行っている。対外的なイベントと、町内向けのイベントの2本立てで行っている。にぎわいを外から取り入れるだけでなく、町内で商売をさせてもらっていることから、町に還元するイベントにも取り組んでいる。

コロナ禍においては、イベントが中止になり影響が出ているが、コロナの状況だからこそできることを考えて、オンラインを用いたバーチャルツアーなど、状況を活かして次につなげる活動を行っている。

春蘭の里実行委員会

北國とおり町にぎわい協議会

### (3) 中能登スローツーリズム協議会（中能登町）

<発表者>

亀井 孝男さん、久保 勝康さん

<報告概要>

中能登スローツーリズム協議会は、2年前に任意団体として立ち上げ、今年8月に社団法人化した。里山の田植え体験、能登上布や炭化米のおにぎりの里の調査、鶉様道中の交流、石動山山と眉状山の二つの山系に位置する歴史遺産の調査を法人化前から行ってきた。法人化してからは、石動山のツアーの準備中であり、11月には25名が訪れる予定。コロナ対策のため何をすればよいか、分からないことが多く、四苦八苦している状況であるが、眉状山のボランティアガイドと手を取り合って、中能登全体のツーリズムを作っていきたい

と考えている。

#### (4) たかしな地区活性化協議会（七尾市）

<発表者>

任田 和真さん

<報告概要>

高階地区は七尾市の南西部に位置する農村集落である、少子高齢化が止まらず、小学校も保育園も廃校・廃園となっており、あらゆる分野で後継者が不足している。その現状を解決するために、協議会が発足し、移住・定住支援活動と廃校の活用の2つをポイントに活動している。

コロナ禍においては、地域版緊急事態宣言発出、使い捨てマスク全戸配布、移動スーパー導入、廃校ドライブインシアターの実施といった取組みを行った。移住者と地域住民、いろいろな方々が協力して地域づくりを行っており、「なにもないけど、人情がある」をキャッチコピーに、今後も活動を行っていききたい。

中能登スローツーリズム協議会

たかしな地区活性化協議会

#### (5) ハピネスクローバー（小松市）

<発表者>

宮川 英美さん

<報告概要>

ハピネスクローバーは、多世代交流施設「しあわせのいえ」のフリマ開催をきっかけに、子育て中のママにより発足した。2019年2月にはじめてフリマ開催を企画するも、コロナにより延期したが、10月9日に第1回しあわせマルシェを開催することができた。開催準備にあたっては、すべてウェブ会議で決めて進め、当日は平日開催としてコロナ対策をして開催することができた。コロナで人と話す機会が少なくなりがちな今だからこそ、顔と顔を合わせての交流が必要ではないのかと考え、定期開催を目指して今後も活動していききたい。現在、第2回の開催を11月7日の土曜日に予定している。

#### (6) タント演劇学校（能美市）

<発表者>

國分 谷彦さん、高坂 拓史さん、奈良井 伸子さん

<報告概要>

平成10年に総合芸術活動づくりとして演劇学校を開校。楽しんで舞台を作る人が集まっている。23回の公演を行い、11回はオリジナル公演である。今年の公演は中止となった。タント演劇学校の特徴として、年齢層が広く、小学生から70代がメンバーである。また、不登校の人たち、障害者、地域の文化活動している人たちが出演している。プロの歌手、

ダンサー等に協力いただいている。陰で支えている人たちに感謝の心を育てることを大事にしている。

若手から見ると、お年を召した方と芝居を行うことで、新たな発見があって楽しい思いで活動している。コロナ禍においては、5月から活動を再開し、能美市のコロナ対策の基準を守って、稽古を続けている。ソーシャルディスタンスを保ってどのような演劇ができるか、悩みながら活動中である。

#### ハピネスクローバー

#### タント演劇学校

##### (7) エコのたね (小松市)

<発表者>

廣瀬 裕一さん

<報告概要>

エコのたねは、主婦や普通の人を中心に、昨年10月に結成。気候変動に対し、子どもたちの未来に向けて、日々の生活でしていけることからやっといこうと活動。気候変動セミナー開催と、北國とおり町と協力してエコなお店認定制度「エコまつ」の活動をおこなっている。

コロナ禍においては、多くの人が集まるイベントができていないこと、人によって認識の差があるので困っている。一方で、コロナ禍でも、日常生活のなかでできることとして、レジ袋意識アンケートや、屋外でできる安宅海岸清掃活動を行った。

「3密を避けて地域と密着」として、コロナだからこそ関わらないといけなと感じたので、地域に根差して楽しみながら活動していきたい。

##### (8) 宝活 (宝達志水町)

<発表者>

市村 直哉さん、山田 真美さん

<報告概要>

宝活とは、宝達志水をもっとたのしくする活動の意味であり、それぞれのグループが活動している。例えば、山あり海ありの会では、自然を背景に地域の良いところを見つけて、登山や釣りの活動を行っている。また、自給自足の会は、自然栽培の豆から味噌づくりをやっている。クリーンピーチ&ビールは、海でゴミを拾い、飲み物で乾杯することをFacebookに投稿している。仲間のみんなでやりたいことをやって楽しむことを大事にしている。

現状ではグループ間の連絡が機能していないという問題がある。コロナの影響だけではなく、なかなか活動できていないという現状であり、個人個人がやることに対し責任をもって、意思の連携を取って積極的にならないと難しいと考えている。

(9) くくり徳山 (能美市)

<発表者>

山田 省祖さん

<報告概要>

2016年8月から能美市下徳山町で開墾を開始し、コミュニティ再生の手段として、休耕田を復活させること、協働で作物を育てること、生産物を生かしたイベントを行っている。4年間の活動で、休耕田で収穫を得たり、周辺住民の参加が増えたり、他団体と連携する実績が出ている。

コロナ禍においては、16名程度のメンバー内での活動に限定し、4年越しの収穫を小規模にした。一方で、自然は待ってくれないので、作物の栽培は止めず、新規開拓のための充電期間としたい考えである。

エコのたね

宝活

くくり徳山

(10) 報告団体への質疑応答

まず、赤須コーディネーターから次のとおり感想があった。

9団体多様な活動があり面白く、オンラインだとそれぞれのフィールドがわかるのがよいという感想があった。コロナについての影響としては、人との交流が制約を受けているなかで、どうすれば集まれるか、工夫して規模は変えながら実践しているところもあれば、やり方が分からず迷っているところもあった。

人との交流が限られているならば、心の交流に力を入れていくことが、今私たちにできることだと思っており、今回は、オンラインという通信手段を、オンラインイベントを契機により地域づくり団体がスキルを持とうということでオンライン開催を決定したという経緯があった。



次に、赤須コーディネーターの進行により、報告を行った団体への質疑応答が行われた。

#### ①くくり徳山

Q：休耕田の開墾は住民の交流を作っていくことが目的なのでしょうか、そのことは成果として現れたのでしょうか。

A：当時町会長をやっていたときに、困っていることがあるからやってもらえないかということで始めた。徳山来てもらった人に交流してもらいたいという思いがあった。新しい住民の方が参加しやすくなるようなかたちに在所の人たちが整備し、参加しやすいイベントを作り上げた。

#### ②エコのたね

Q：北國とおり町と連携した背景を教えてください。また、考え方の相違はあったのでしょうか。

A：エコのたねだけでやっても影響力がなく面白くないので、共通の友人の田村さんにつなげてもらい、北國とおり町と一緒にやることができた。広まる速度が速く、同じ方向を見てやっていけるのが楽しい。

北國とおり町の方はとても心が広く、相違はなかった。話を持ち掛けるとすばやく中出さんが動いてくれた。北國とおり町は柔軟な考えで動きも早かった。

#### ③宝活

Q：グループ相互の刺激はありますか。仕組んでいく考えはありますか。

A：Facebookグループページがあり、それぞれのグループのつながる接点がプラットフォームとなっている。お互いに人のやりとりや情報のやりとりの機能が果たしている。例えば、ピーチの清掃のあとに情報をくれる方がいて助かっている。もっと交流すれば盛り上がっていくと思う。

#### ④たかしな地区活性化協議会

Q：協議会の財源はどのようになっていますか。

A：市の予算で事業を実施。廃校のイベントは、地域の方から寄付金を募ったり、七尾市の提案型補助金に申請して資金を得ている。予算の配分や、事業計画は自分たちで立てている。七尾市からの委託は、コミュニティセンターの運営委託金ぐらい。地域おこし協力隊で予算はないので、移住体験住宅は地方創生推進交付金を3か年150万円活用して、賃貸契約をして移住希望者に貸し出している。住民の会費負担は、地区協力金というかたちで活性化協議会にひと世帯いくらかというかたちで入っている。

### 3. 全国のキーパーソンによるエール講演

#### (1) 有限会社ひまわり亭 代表取締役

本田 節さん「被災地で届ける『命の食』のつながり」

#### <進行担当>

【コーディネーター：赤須 治郎、副コーディネーター：水本 協子】

#### <講演概要>

熊本豪雨（令和2年7月豪雨）では「ひまわり亭」の前を流れる球磨川が氾濫し、約2メートルの浸水被害を受けた。被災後に地域の仲間たちが徹夜で泥を撤去してくれて、すぐに厨房が使えるようになったことが、4日後のキッチンカーでの炊き出しにつながった。

この3か月間は毎日欠かさず、被災者、特に自宅避難者お一人お一人に食事を届け、延べ1万3,000食が提供できた。食材や物資で支えてくださる全国と地元の方々のお陰で、日々感謝している。

23年前に「ひまわり亭」をオープンした理由は、地元でこういう災害があった時に一番動ける拠点を作っておくことであった。あらためて、自分自身の地域づくりの原点に戻ることができたと思っている。

#### <感想>

本田節さんは、地元・人吉市を拠点に「命と食」をテーマに地域づくりを続けてこられ、全国を飛び回って講演されるなど実にパワフルに活動されています。熊本地震（平成28年4月）の翌年2月には金沢までお越しいただき、石川地域づくり協会の有志でつくる団体「災害支援ネットワーク石川」のシンポジウム「いのちと食の地域づくり～熊本震災の現場から～」にてご講演をいただきました。

今回の熊本豪雨では、ご自身も甚大な被害を受けたにもかかわらず、発災4日後には被災者支援を始めるという驚くべきチームワークを発揮。SNSやテレビ番組を通じて発信された、キッチンカーで地域を走り回り、手渡しで食事を届ける映像、そのひたむきな姿と笑顔から、全国の地域づくりの仲間たちが熱いメッセージを受け取りました。

本田さんとともに地域づくりを実践してきた仲間、火の国未来ネットワークの皆さん、ふるさとや人へのあたたかな思いや自分事より他人事を優先する姿勢に共感して集まってきた皆さん、全国の応援者の皆さん。多くの方々によって結ばれた絆が、復旧・復興に立ち向かう力を分かち合い、支え合うことにつながっているのではないかと思います。

円陣の事前打ち合わせで、本田さんが語られた「これほど地域づくりをやっていてよかったと思ったことはなかった」という言葉が、心の奥深くまで響きました。ふるさとを愛し、長年邁進してきた方だからこそその一言ですが、地域づくりの過去も現在も未来も、本田さんのこの言葉の中に生きていると感じています。（水本運営委員）

#### (2) 東北まちづくりオフサイトミーティング発起人

後藤 好邦さん「ウィズコロナ時代のネットワークづくり」

#### <進行担当>

【コーディネーター：大湯 章吉、副コーディネーター：渡辺 直英】

#### <講演概要>

ネットワーク活動をはじめたきっかけとして、平成17年に自治体職員の勉強会に参加

したことで外の世界を知り、自分自身や自分の所属する組織の振り返りができるとともに、同じ思い、意識を持つ仲間ができた。これを後輩にも体験してほしいという思いから、東北まちづくりオフサイトミーティング（以下、東北OM）を作ることとなった。

東北OMは、まちづくりや地域活性化に向けた人財育成や被災地・復興支援を目的として、自治体職員が中心となって民間企業やNPO、大学関係者や学生などを巻き込んだネットワークとして自主的に集まり、現在ではメンバーが1,000人規模になっている。

定期的な勉強会・イベントの開催や、ITを活用した情報発信・情報交換を二つの活動の柱として、共感を発信することを大事にして活動している。これからのネットワークづくりでは、共感を大切にすることに加え、「総動」として1つのゴールを目指して地域全体でたくさんのセクターが力を合わせて地域づくりに取り組むことと、Withコロナ時代における「オンラインとオフラインのバランス」が大切であると考えている。オンラインは便利なツールとして活用するものの、信頼づくりの場としてリアルな交流が必要であり、どう組み合わせていくかがこれからの課題である。

### <感想>

これから求められる人物は、「愛される宇宙人」、つまり、既存の考え方に縛られず、新しい発想でチャレンジし続ける一方、周りの人間から愛され評価されている人物であるということと、信頼を得るための方法として、参加してくれた人に対して翌朝までにメールを送る（自分ができる、人がやらない面倒くさいことをすることが信頼につながった）ということが印象に残りました。（渡辺運営委員）

### （3）金城大学社会福祉学部 教授

内 慶瑞さん「新たな時代でふだんのくらしのしあわせを」

### <進行担当>

【コーディネーター：寺本 紀子、副コーディネーター：三津井 司】

### <講演概要>

コロナ禍によって、「三無い生活」、すなわち、すること・いくところ・話す人が無いという人が増えており、高齢者や障がい者にとって大きな課題となっている。「一億総障がい社会」という言葉があり、これまでは心身の障がいであったが、令和は活動の障がいになっている。不便を感じて、しんどい思いをしている人ばかりである。そんな状況の今こそ心の距離は近くして、矛盾する諸要素を乗り越え、皆がつながるチャンスである。

ふだんのくらしのしあわせづくりとは、住み慣れた自分の町内で、“好い加減”の対応で、互いに近くで助け合えるもので、「ご近所で、互近助できます」というスローガンである。地域福祉は未来への投資であり、成果がすぐには見えないものである。「しゃべろう」「やってみよう」「楽しもう」の仕掛け、そして見守る具体的なカタチをつくるのが大事である。令和は「居食住」の時代として、美味しく楽しく食べて居心地が良くて安心して住めるコミュニティが全国各地にできるとよい。

### <感想>

オンラインでのエール講演について、金城大学の内先生は「地域福祉のありかたwithコロナ」という表題で講演されました。講演と異なる分野の講演者の方々とのクロスト

ークをつうじて、①謙虚に学ぶこと②人脈づくりや仲間づくりの有用性③分野の立ち位置の違いの理解を再確認しました。加えてコーディネーターの方々と先生のやりとりのなかで、「つながり」や「相互理解」の重要性を再認識しました。(三津井運営委員)

#### (4) 講師3名によるクロストーク

赤須コーディネーターの進行により、クロストークが行われた。

・地域づくりのなかに福祉の人を巻き込んでいく方法は？

(寺本) 障がいのある人も、住民としてそこにいる人であり、地域づくりに入ってきてよという呼びかけではなく、どんな状態の方でも、住民の仲間としてスタートラインに立っていると捉えてほしい。

(赤須) 内先生のお話にあった、「ふだんの暮らし」のなかで地域づくりを考えていくのが地域福祉の考え方であり、地域づくりをやっている人の多くは、地域づくりがイベントや事業と考えている節があるので、ギャップが生じているのではないか。

・講演いただいた先生同士でご質問は？

(後藤) 本田さんのご縁づくりはこれまでどうかたちで広げてきたのか、ご縁を継続していくうえで大切にしていることは？

(本田) 外に出て学ぶ機会が多かったのが全国にご縁を作るきっかけになった。地域づくりの全国大会や、コーディネーター研修があることで、全国から志を持って集まる人で、同じ志を持った人と話すことが学びになった。ずっとべったり会っていなくても、年に1回でもいいから手紙でも電話でも、情報をもらうことで縁が切れてないなと思える。石川県でも、大湯さんや赤須さん、濱さんから連絡をいただき、非常に身近に感じている。

(内) 広い世界のとつながりが人間を大きくするというのを痛感しているので、お二方の話に共感している。

(大湯) 本田さんが今人吉市の現地で一番必要なことは？

(本田) ボランティアセンターを支える人材、県外からでも専門的な人が入っていただく環境が必要。行政にはその仕組みを作っていくことが求められる。

(濱(協会専任コーディネーター)) 人吉の農家民宿で被災していないところが被災された民宿を泊めて、助け合いがあったと聞いた。

(本田) 10の自治体で広域連携していたところがよかった。人吉は全滅状態だったので、宿泊されたのは、人吉市外の農泊だった。分散していく連携があることが大きく役にたった。被災した仲間を受け入れてくれる仲間が支援してくれた。防災のあり方、支援のあり方の学びのために人吉に来てほしい。

(内) 地域福祉は切り口は違うかもしれないが、ふだんの暮らしとして地域づくりの場で言っていこうと考えていた。地域づくりは参加型というイメージをもっているが、本田さんの災害復旧の支援、そして我々の普段の暮らし、それぞれの立ち位置が違うが、すきまが見えたことが意義あった。これをきっかけに、地域福祉がどうしたら地域づくりに参加していけるか、あるいは地域福祉の活動に地域づくりが入っていけるか、そんなことができなにか感じた。

(後藤) できるかぎり福祉の人と連携しながら地域づくりをしていきたいと考えている。福祉、医療、まちづくりのファシリテーターと連携したネットワークを作って介護の普及啓発を一緒に考えて、手段として介護をテーマにしてクロスロードというシミュレーションゲームを作成している。福祉を地域づくりの仲間として参加してもらうかが大事な視点だと思っている。自分もつながるハブ的な役割をしていきたい、ハブとなる場を作りたい。

・オンライン上からのご質問は？

(柳井雅也さん(東北学院大学教授)) 本田さんに質問で、被災を受けた時の資金繰りはどういうふうにされているか？

(本田) 若者の情報発信によりクラウドファンディングの活用と、熊本県SDGs財団により企業から支援をいただいた。現場のあり方や思いを伝えることができてよかった。若者にとっては、クラウドファンディングにより達成感が得られ、ふるさとに恩返しをしたというメッセージをくれたことがありがたい。自らが知恵を出し、若者が資金を集めたことが今回の大きな成果である。

#### (5) 閉会

クロストーク終了後、谷口 健一 石川地域づくり協会運営委員長より挨拶があり、閉会となった。

#### 4. オンライン交流会

閉会后、オンラインでは、渡辺運営委員による進行でエール講演講師を交えて交流会を行い、振り返りを行った。

<参加人数> 7人

また、地場産業振興センターのスタジオ会場に集まった方で振り返りを行った。

<参加人数> 15人